

優秀賞

「This is our culture, That is your culture.」～異文化理解で守る、世界平和と人々の誇り～

鹿児島大学教育学部附属中学校 2年

前田 葵

この夏、私は鹿児島市の派遣事業でマレーシアとインドネシアを訪れ、日本とは大きく異なる様々な文化と出会った。

派遣先の選択肢にはアメリカのマiamiもあったが、私は迷わずマレーシアとインドネシアを選んだ。普段触れることが少ないからこそ、東南アジア文化を体感したかったのだ。

実際に現地で目にした、マレーシアの多民族国家ならではの文化や、インドネシアのイスラム文化は、どれも強く印象に残っている。

私が異文化に触れた感動や驚きを現地の人に伝えた時、彼らが口々に言った言葉がある。

「This is our culture.」

どの人も、自らの文化に誇りを持ってそう言っているように感じられた。彼らの輝く瞳や嬉しげな口調が、今も脳裏に焼き付いている。

帰国してから数日たったある日のこと。私は友人たちに、派遣事業での経験を話した。私が最も驚いたことの一つである、トイレで用を足した後、トイレットペーパーを使わず、水で洗う習慣について語った、その時である。

「何それ。汚い。」

友人の一人が吐き捨てるように言ったのだ。

私は、彼女の否定的な言葉にとってもショックを受けた。自国の文化を誇らしげに語った、マレーシア、インドネシアの人々の表情や言葉が頭に浮かび、胸が痛んだ。

思えば、今、世界各地で起こっているテロは、このような、自分と異なる価値観の否定が原因だ。また、テロを起こすイスラム過激派と一般的なイスラム教徒を混同し、イスラム教自体を排除しようとする人もいる。これでは異なる考えを持つ人々はいつまでも分かり合えず、それが原因で争いも起こり得る。誰もそんな世の中で生活したくはないだろう。

私には、目標ができた。

「全ての人が自分たちと違う文化について理解し、受容できる平和な世界を作りたい。」

中学校2年生、14歳。社会的には全く非力だ。そんな私でも、他への無理解が原因の争いや排他主義が存在するこの世界を変えるために、何か行動を起こしたいと考えたのだ。

私には何ができるだろう。そして思い出したのが、私の学校で行われている、「GT」という活動だ。これは、「Global Time」の略で、授業前の朝の時間を利用して、外国の文化について英語で学ぶものだ。私は、GTの企画、運営に関わっている。

このGTの内容を、ガラッと変えるのだ。現在、GTでは主に、英語圏である欧米の文化について学んでいる。その題材を、日本人にとって欧米文化ほどには馴染みのない、アジア、アフリカの文化にすることを提案しようと思う。GTを、皆が、素晴らしいのは欧米文化だけではない、と感じる場にするのだ。

文化に優劣はなく、その価値は全て等しい。そのことを、私は派遣事業での経験をもとに、少しでも多くの人に伝えよう。世界中の人が、

「This is our culture.」

と、自分の文化を誇れる世界を築くために。